

道衍（姚廣孝）の信仰

上 野 忠 昭

一

幸田露伴は大正八年四月「改造」に、小説『運命』を発表し、明の靖難の変における建文帝・永楽帝の興亡の顛末を描き、運命に実を委ねる者が、天の命有るを知る知らざるにかかわらず翻弄される様は、いかなる狂言や綺語の類よりも、奇にして妙であることを訴えた。この小説は、その案を清の呂熊撰の『女仙外史』によるものの、詳細に至るまで正史に拠って書かれている。主人公はもちろん建文帝であり永楽帝であるが、彼らを取りまく数十人の人物についても細かく描写されている。その中で、燕王（後の永楽帝）に靖難の師を起こすことをすすめた謀師道衍は特によく描かれている。道衍は、露伴評すらく、「又一個の異人といふべし。魔王の如く、道人の如く、策士の如く、詩客の如く、（略）所謂異僧なり」と。この道衍の仏教僧としての信仰は実際のところ如何なるものであったらうか、彼の伝記と著述を足がかりに考察を加えたい。

二

道衍の伝記については、すでに牧田諦亮博士が『東洋史研究』十八刊三号において「道衍傳小稿」と題されて詳細な研究を發表されており、ここでは道衍の信仰を考察する上で必要と思われる経歴のみについて触れることとする。

道衍（二三四～一四一八）は姓は姚氏、江蘇長洲の人、幼名は天禧、祖は菊山、父は妙心（震卿）、その家は代々医者であったが明の王鏊の『守溪筆記』に、

「幼くして父母に白して曰く、某醫^{わかし}と爲るを樂わず。但讀書し學を爲して以て王朝に仕へ父母を顯さんと欲す。否^{しからず}んば則ち佛に従つて方外の樂を爲さん。」

とあり、同様の記事が、『明書』卷一六〇姚廣孝伝にも載せられている。これによると、家業の医者をつぐことを願わず、読書勉學して、それによって仕官して父母の名を顯彰するか、それがかなわなければ、仏の教えに従つて方外の樂しみを味わいたいと言い、十四歳の時、出家して僧となり、妙智菴に入り、名を道衍、字を斯道とした。この記載が史実に基づくかどうかは明らかではないが、俗世間における立身出世がかなわなければ仏法に帰依せんといったあたりは、後の道衍の姿を暗示するものがあるといえよう。僧となる以前の道衍については『逃虛類纂』第九所収の「題孟氏世系圖後」の冒頭に自ら、

「衍髫歲の時、材翁先生に従つて儒學を授かる。里の同學の者三十餘輩なり。」
と、里の子供たちとともに儒學を習いながらも、

「衍未だ佛を學ばざりし時、西山の間を往來し則ち海雲院廸公有るを知る。禪師は孤剛秀傑、卓然として特に其

の言を出して行と一つも妄ならず。(中略)特に衍、方に童艸なりと雖も敬いて之を慕ふも敢て及んで見えず」
〔『逃虚類藁』第六所収『百丈泉銘并序』〕

と西山海雲院の禪師を敬慕するなど、『守溪筆記』に記されている道衍の言葉を想起させる記録が残されている。僧となつてからの道衍の学問は、ひとり仏教にとどまることなく、『明史』卷百四十五には、

「道士席應眞に事へ其の陰陽術數の學を得」とあり、また『國朝獻徵録』卷六所収の王鏊の「資善大夫太子少師贈榮國公諡恭靖姚廣孝傳」に、

「相城の靈應觀の道士、席應眞は讀書し道を學び兼ねて兵家の言に通じ、尤も機事に深し。廣孝、之に従ひ弟子の禮を執り、是より盡く其の學を得。然れども深く自ら退け人に藏して知る者無し。其の友、王行のみ獨り之を知る。」^②

とあり、兵家の言に通じた席應眞よりその學をことごとく得たことは、靖難の挙兵後、參謀として活躍した道衍の知識の源となつたものであらう。道衍の學識の広さについては、彼の墓塔のかたわらの『明太宗御製推忠國協謀宣力文臣特進榮祿大夫上柱國公姚廣孝神道碑』^③(以下『神道碑』と略称する)に、

「心に内典を潛め、其の闢奥を得、發揮激昂し、廣博數暢し、波瀾老成にして、大いに宗風を振るふ。旁わまねく儒術に通じ、諸子百家に至るまで、貫穿せざるは無し。故に其の文章は閑嚴、諸律は高簡にして、皆塵世を超絶す。名人魁士と雖も、其の能に心服し、毎に以爲らく及ばざる也と。」^④

とたたえていることから窺い知ることができる。

道衍の仏教僧としての履歷については、正史類にはほとんど記載がなく、僧伝類等の仏教側の史料に拠らざるをえない。『増集續傳燈錄』卷五によると、姑蘇北禪寺の虚白亮公に従つて天台の教えを習い、ついで徑山の愚庵智

及のもとに参じ、洪武三年には臨安の普慶寺に住し、後に杭州の天龍寺、嘉定の留光寺に住したという。『道餘錄』の道衍の自序によると、愚庵智及に師事したのは年三十に近くなった時であり、ここで禪学を修している。『逃虛類藁』第七には「徑山第五十三代住持明辯正宗廣慧禪師愚庵及和尚行狀」を収めてその伝を述べ、その末尾には、

「衍、迂繆ことばたぐみにして文ならず。幸いにも門人の列に廁す。故に敢へて師の出處の萬一を録す。當代の立言の君子を求めて、以て其の塔に銘し、無窮に垂るる者なり。洪武十一年九月廿五日門人道衍謹狀。」

とあり、洪武十一年（一三七九）九月四日の智及入寂の直後に、この行狀を撰している。又、この銘云々については、宋濂撰『明辯正宗廣慧禪師徑山和尚上及公塔銘』に、

「〔智及の〕上首弟子、普慶の住持道衍、是に籍るの故に自ら其の行を狀し、來たりて銘を請ふ。」

とあり、先の『逃虛類藁』所収の及和尚行狀の道衍の語と符合し、この間の事情を明らかにするものである。また、智及には『愚庵智及禪師語錄』があり、これにも洪武八年（一三七六）二月二十一日の日付をもって、宋濂撰「徑山和尚愚庵禪師四會語序」が附されている。このことも『逃虛類藁』所収の及和尚行狀に記されており、智及・宋濂・道衍の交際を窺うことができる。この語録については洪武十三年（一三八〇）六月に道衍らが「四會法語の結集、鋟板、流通、印行」の事が成るに際して、先師の靈を祭ったことが『逃虛類藁』第八所収の「祭先師愚庵和尚文」のよって知られる。又、道衍は智及が退隱した海雲精舎の仏殿の後ろの山に洪武六年に産した金芝が、智及の没後洪武十四年に再生した瑞祥によせて次のように頌を述べている。

「於戲ああ、禪師は一代の偉人なり。其の道光德澤は山林を被ふ。（略）衍、稚魯少文にして忝くも禪師の道を嗣ぐ。

故に敢へて筆を執り用つて頌の言詞を陳べて曰く。」（『逃虛類藁』第一「瑞芝頌并序」）

智及の伝記は『續燈存藁』卷五等に載せられているが、この道衍撰の行狀はもっとも信頼できる史料であるとい言

えよう。また、宋濂撰文の塔銘により、道衍は洪武十一年にはまだ普慶寺に住していたことがわかる。さらに道衍が智及のもとを往来していた間の記録として『守溪筆記』に

「洪武四年、詔して高僧を取せしめるも、病を以て免ず。八年、詔して儒學の僧をして禮部考中に出仕せしむるも、仕を願はずして僧服を賜って山に還る。」

とある。洪武八年（一三七五）の詔に関する事情については、『逃虚類藁』第三所収の「白馬照禪師塔銘」に、

「洪武八年乙卯、衍、儒學に通ずるに因りて召して京師の天界禪寺に留めらる。」
と、記している。洪武十五年（一三八二）に宗泐の薦によって燕王に親近するより以前に、このように二度にわたって詔によって召し出される機会があったにもかかわらず、自らそれを願わずに見送っていることは、後の道衍の行動と全く矛盾するものである。この二度の召出と宗泐の薦の間には、師智及の死があり、これが道衍の心境の変化に影響したのかもしれない。

このように、道衍は径山において智及に長く師事し深く傾倒し、禪學を修めていたのであるが、その信仰は禪にとどまることなく、浄土に傾いていったようである。『諸上善人詠』『浄土簡要録』は共に、洪武十四年の日付の自序を附する道衍の浄土信仰宣揚の代表的な著述である。この『諸上善人詠』の序において、道衍は自らの信仰の変遷を述べて

「衍、不敏にして蚤く教庠に入り、中ごろ棄て、禪苑に歸す。俱に指を染むと雖も、皆就る所無し、然ども、暮景漸く迫りて志は浄邦に在り。」

という。天台に始まり、道衍の禪・浄土という信仰の推移については、『浄土簡要録』に附されている大佑の洪武十四年の跋文にも記するところである。大佑は『諸上善人詠』にも跋を附しており、又、洪武十三年に道衍は大佑

の依託によって「七寶慧順禪師塔銘」^⑥を撰し、大佑の撰した行録をもとに洪武十三年十二月に「故華嚴法師古庭學和尚塔表」^⑦を撰し、更には大佑のために「送梓大李均茂偈并序」及び「送坊人呂伯通偈」^⑧を撰しており、道衍と大佑の交際は、かなり親密であつたことを知る。『浄土簡要録』は、浄土を志した先人の著書の中から要文を選び、浄土願生者の指針とするために編せられた書であり、その自序には、

「今年（洪武十四年）の夏、余、穹窿山中の海雲精舎に客たり。因みに浄土の諸書を閲して以て長日を銷す。」とある。ここにみられる穹窿山海雲精舎は、道衍が幼年時代に敬慕した廸公禪師の住したところであり、その法孫愚庵智及が十四歳で出家し、洪武三年に退隱したところである。『逃虚子詩集』卷六に「秋日重遊穹窿山海雲精舎」十首があり、牧田博士はその詩文によって、道衍がこの寺にいたことを指摘されている。道衍とこの寺の關係については、その他、先述の「瑞芝頌并序」^⑨において、海雲精舎の仏殿の後ろの山に産した金芝によせて頌を賦し、「連理木賦」^⑩においては海雲院の山茶の木によせて詩を賦し、又、「海雲院東軒記」^⑪において、退隱した智及に従つたのがこの海雲院の東軒であつたことを記していることから知る事ができる。洪武九年にこの海雲院に小室を設けており、洪武十五年撰の銘并序によると、

「洪武九年春、衍、旨を奉じて西山の海雲院に還る。小室を闢き、弥陀の畫像を西隅に奉じ、あまきゆう昕夕之に面して稱念す。過客無ければ則ち終日危坐し澄想するのみ。之を名づけて蓮華室と曰ふ。蓋し、期、當來せば極樂國の蓮花に化生するなり。夫れ極樂國に七寶池有り。蓮花は四色にして、大きさは車輪の如く、或ひは高さは十二由旬なり。一一の花葉は八萬四千の光明有り。甄叔迦寶、梵摩尼寶は以て映飾を爲す。九品の間に三輩を列し化生す。凡そ他方世界の衆生も亦、一念を發して彼の國に生ぜんと欲せば、善根、池内に感ぜられ、即ち一花を成す。精進すれば鮮榮、懈退すれば萎悴す。故に龍猛云く、若し人善根を種うるも疑へば則ち花開かず、信心清浄なれば

花開き既に佛を見る。衍、少き時自り弥陀の敬法有るを知るも、業深く障重し。造脩を發願すと雖も、或ひは進み或ひは退く。玆年四十有八にして、死期將に至らんとす。故に痛みて自ら鞭策し要す必ず彼の國に往きて蓮花化生せん。冀は、是の花の榮有りて悴無からんことを。其の室に扁して以て自ら勗む。乃ち爲に銘して曰く、

彼の蓮華を緊ひて寶池に生ぜん

善根感ぜられて聖澤是れ滋ふ

大きさは車輪の如く、四微を離れず

摩尼の間に飾光明陸離たり

龍猛の格言は信にして疑はず

嗟、予小子、脩に策ち罷む無し

乃ち期すらく、其の蔓の榮有りて萎無からんことを

決定して化を托すこと此に在りて詩を銘ず^⑩

と、この蓮華室は浄土信仰実践の場所であることを記している。洪武十五年は宗泐の推薦によって燕王のもとに侍した年であり、その前後において道衍は、「業深く障重し」と自ら反省し、四十八歳にして「死期將に至らんとす」という、蓮華化生をひたすら願う真摯な浄土信仰者であったことがわかる。『浄土簡要録』序にある「浄土の諸書を閲した」のは、恐らくはこの蓮華室においてであっただろう。『浄土簡要録』及び『諸上善人詠』の序の末尾には「蓮華室沙門道衍序」とあり、これら浄土信仰鼓吹の書における署名として意識して用いられたと考えられる。蓮華室に関連するものとして、やや後の撰であると考えられるが、道衍の著述『蓮室集』^⑪がある。その内容はやはり浄土信仰の宣揚であるが、『蓮室集』は現存せず、『碧山日録』『蔭涼軒日録』によってその存在を知り、佚文を

『碧山日録』から抄記するのみであり、その自序も道衍の署名も見ることとはできないが、書名の蓮室とは、蓮華室に由来するものであらう。

さて、先にも少し触れたように、洪武十五年に、

「孝慈高后喪す。列國の親王、各、奏して名僧を乞ひ、歸國して齋を脩す。是において、左善世宗泐、道衍等三名を擧す。太祖親しく道衍を選び、慶壽寺に住持せしむ。」(『守溪筆記』)

と、明の太祖洪武帝朱元璋の皇后馬后が亡くなり、各国の諸親王が葬儀に参列し帰国する時、太祖は高僧を選んで諸王に侍せしめ誦經薦福し齋を脩せしめたが、その時、宗泐の推薦によって道衍は燕王に配属されたのである。『神道碑』に、

「朕が皇考高皇帝、一見して之を異とし、命じて慶壽寺に住持せしむ。」

と、道衍が洪武帝に選ばれた折の状況を記している。道衍を洪武帝に推した宗泐(一三一八—一三九一)は、宋濂の『宋學士集』補遺卷三、『明書』卷一六〇、『補續高僧傳』卷十四などに伝が見える。それらによると、字は季潭、全室と称し、台州臨海の人である。八歳のとき、笑隱大訴に従って出家し、後にその法を嗣いだ。その後、杭州中天竺寺に住し、径山に移り、洪武帝の詔により金陵天界寺に住した。洪武十一年には詔を奉じて、杭州普福寺の如玘とともに、般若心經・楞伽經・金剛般若經の註を撰し、又、西域に莊嚴・寶王・文殊等の經典を求め、洪武十五年三月に帰朝し、同四月二十二日に僧録司左善世の職をさづけられている。『明史』卷百四十五に、

「北固山を経て、詩を賦して懷古す。其の儕の宗泐曰く、此れ豈に釋子の語ならんや。道衍笑ひて答へず。」

といい、又、『明書』卷一六〇には、

「口づから詩を賦して曰く、

譙園 年来戦ひて血乾き

烟花 猶自ら半ば凋殘す

五洲に山近く朝雲乱れ

萬歳に樓空しく夜月寒し

江水 潮無く鐵甕に通じ

野田 路有りて金壇に到る

蕭梁の事業 今何にか在らん

北固青青として 眼看るに倦まん^④

と。僧宗泐、其れを見て膝を揺って高く吟じて、之を誦[＊]めて曰く、此れ豈に釋子の語ならんや。斯道、斯道、汝、南朝を薄んずるかと。」

と、より詳しく僧宗泐・道衍について記しており、『補續高僧傳』卷十四にも同様の記事が書かれている。『逃虛子詩集』はこの詩を収録していないが、宗泐・道衍の關係を示すものとして、『逃虛子詩集』卷八に「全室禪師使四天取經回朝奉賀」の詩を録している。

宗泐によって推挙された道衍は、北平に至り慶壽寺の住持として燕王の母后の追福のために「誦經念佛修齋」^⑤を行っていたが、このころの燕王と道衍の關係について、『明史』卷百四十五に、

「府中に入し、跡甚だ密なり。時時人を屏^{しぞ}けて語れり。」

といい、『神道碑』には、

「朕が藩邸に事へ、毎に進見し論說すること勤勤懇懇なり。有道の言にあらざるは無し。察するに其の所以は堅

確、有守、積純にして疵無し。朕益ますます之を重んず。」

と、單に母後の追善を修する僧としての關係だけでなく、様々な事柄について燕王の相談相手になっていたようである。北平に至った洪武十五年から、靖難の変が起こる建文元年までの十四年間の道衍の僧としての活動は伝記類には記されておらず測りがたいものがあるが、わずかに残された二、三の史料によってその行跡をたどってみよう。洪武十一年に宗泐らは詔によって、般若心経など三経の註を撰したが、道衍は、

「當今、聖天子、詔して天下の僧徒をして般若心経及び金剛・楞伽に習通せしむ。復た詔して諸郡の禪の講師の僧を取りて大天界禪寺に會し三経の古註を校讎し其の説を一定し、天下に頒行し以て廣く傳持せしむ。是において天界住持宗泐等、古註を折衷して釋す。（中略）今年夏、門人智榮等五七輩、禪坐の餘と、新註般若心経を以て余に講演を請ふ。願れば、余、禪者にして經論の學にあらず。烏ぞ、以て發明す可けんや。蓋し、已むを得ざるなり。始め舊く聞見する所を以て、新註の中の事相の知る能はざる所有者者、句義の局碍する所有者者において、一一節解條析し、以て其の初心の蒙昧を啓く。而して榮等、錄して一帙と爲し板に鋅して以て童學に便せんと欲す。余、固り之を卻け容れざるなり。嗟、古今の論疏既に多く、般若の心愈いよいよ晦し。況んや、余の拙からずも新註の下に又説を加ふるをや。焉んぞ其れ、可ならんか。後の覽者、幸こひねがはくは余の鈍なるを以て置きて誦を爲す勿れ。洪武十六年冬十一月八日北平府慶壽禪寺住持沙門道衍序す。」（『逃虛類藁』卷三「般若波羅蜜多心経新註演義序」）

と、般若心経新註について講演し、それを録して刊行したことが、記されている。恐らく、この道衍の講演録は『般若波羅蜜多心経新註演義序』と題されたのであろう。又、洪武十七年撰の「釋迦覺禪寺記」も『逃虛類藁』に収められている。洪武二十一年には、詔を奉じて房山石経で有名な石経山に至り、隋・遼・金・元と承け継がれ

た事業の壮大さに撃たれて「石経山」の詩を賦している。この詩は序とともに『逃虚子詩集』巻一に収録されており、序には、この詩は華嚴堂（雷音洞）の壁に雕んだことを記している。更に、『碧山日録』の寛正三年十月十八日（及び十一月六日）の項に抄出された道衍の『蓮室集』の佚文に、

「余、慶壽の散席より以来、閑に就き病を城南天王塔下に養ふ。地僻にして、路迂なり。賓客の門に往来すること甚だ尠し。日に念仏三昧を脩し、^{おぼ}禪に寒く、^{むあつ}溽暑しと雖も、未だ嘗て小くも怠らざるなり。武林の妙弁上人事に因りて北平に來たり。余と衆を道くこと十余月、其の祖雪庭の書する永明寿禪師の山居詩集を以て見示す。余、課仏の暇に之を読み、之を咏歌す。永明の当日全身坐して浄土に在るを見るに足る。其の楽しみ、豈に涯有らんや。余、故に喜びて手を釈くに忍びず。因りて用って浄土を懷ひて其の韻に和す。一には以て己を策ち、二には以て人を励さん。^{はげま}。狗尾貂に続くるに足らずと雖も、要す且に余の永明における仰慕の心の忘れざることを見さん。遂に上人をして卷尾に録せしめ、以て諸に帰す。^{これ}。侘日、湖海の間に目を過ぐす者有らば、豈に嚴詩、杜集に附すの譏り、余に無からんや、然れども亦其の然るにまかす。洪武二十五年倉龍壬申十二月仏成道日独菴道衍識」

と、洪武二十五年には既に慶壽寺の住職をやめて閑居して、念仏三昧を日課とし、武林の妙弁上人のもたらした雪庭書の永明延寿『山居詩集』を日課のあいまに読み、自らも懷浄土の詩を和してその卷尾に録すなど、熱心な浄土教信者であったことを記している。又、道衍は智及より禪学を習い、慶壽禪寺の住職をするなど、禪宗に身を置きながら、念仏を行じる浄土信仰者であることについて、『碧山日録』寛正四年二月二日の項に、

「蓮室集、簡首座に示して曰く、念仏三昧は円中の円、頓中の頓、大乘中の大乘、不可思議中の不可思議なる者なり、吾祖菩提達磨大師の最上乘禪と、二無く別無し。禪門の諸師の、永明寿・天衣懷・真歇了・長蘆蘧・慈受

深等の如きの、最上乘禪を伝持すと雖も、猶務めて密かに念仏三昧を修する所以なり。普く群機を摂し、菩薩・声聞・天人・群生の類も發生して念仏すれば即ち仏土に往生を得。譬へば大海は、百川細流の包納せざる無きが如し。最上乘禪は、ひた單えに最上の根器を接し、中下の機は、終に能く入る莫し。念仏三昧は円中の円、頓中の頓、大乘中の大乘、不可思議中の不可思議なる者たる所以なり。」

と記しており、禪淨双修の先師たちを挙げて自らの立場の正当性を説いている。

洪武二十五年（一三九二）に懿文皇太子が亡くなり、洪武三十一年に洪武帝が崩御するや、十六歳の皇太孫允炆が即位して建文帝となった。建文帝の側近の齊泰・黃子澄らは、各地に封ぜられた諸王の勢力を削ぐことを献策し、各王は次々と罪を着せられた。このような状況下において、道衍は燕王に拳兵を勧め、遂に燕王は決意して、齊泰・黃子澄らを誅せんとの名目で、内難を靖んずるという「靖難の師」を起こした。これは洪武帝の死後わずか一年の建文元年（一三九九）のことである。洪武二十五年までは、熱心な念仏行者であった記録が残されている道衍は、この靖難の変以後は、宗教者としての業績はほとんど見られず、およそ僧として相應しくない行動をとりつづけるのである。先ず第一に、燕王に靖難の師を起こす決意をなさしめたのは、まさしく道衍であることは、多くの史書の記すところである。永楽帝は自ら『神道碑』に、

「皇考天に賓するに及んで、奸臣、命をせいま擅にして舊章を變更し、搆へて禍亂を爲し、危、朕の躬に迫れり。朕、宗社の至重なるを惟ひ、匡救の責は實に所在有り。廣孝、時に進退存亡の理を識り、安危禍福の機を明らかにし、機に先んじて謀を効す。言合はざる無し。帷幄の間を出入左右し、啓沃良に多し。」^⑩

と、道衍（廣孝）が燕王にとって信頼すべき側近であったことを述べている。燕軍は、建文帝側の意外な反抗によって苦戦はしたものの建文四年（一四〇二）、燕軍は遂に南京を陥し、燕王は即位して永楽帝となり、戦犯の肅清が

行われたのである。

卓敬、字は惟恭、瑞安の人であり、『明書』卷百三、『明史』卷百四十一の他、袁袞撰『戸部右侍郎瑞安卓公敬傳』、澹園集『明卓忠貞公廟碑』などに伝がみえる。これらによると卓敬は建文の初めに燕王が来朝した時に密奏して、「燕王は智慮、人を絶し、先帝に酷類す。夫れ北平は強幹の地、金・元の由りて興る所なり。宜しく燕を徙して江南に封じ以て禍本を絶つべし。夫れ萌しても未だ動かざるは幾なり。時を量つて爲すは勢なり。勢、至勁にあらずんば能く斷ずる莫し。」

と言ったのに対して、建文帝は、

「燕王は骨肉至親なり。何ぞ此に及ぶを得んや。」

と答へ、更に卓敬は、

「楊廣隋文は父子にあらずや。」

といったが、結局、この言は取り上げられなかった。燕王が即位するや、卓敬は捕えられ責を問われたが、声を励まして、

「若し敬の言を用いたまはば、王、安んぞ此に至るを得んや。」

と言ったので、帝は怒って殺そうとするも、その才をあわれみ、獄に繋いで躊躇していると、

「姚廣孝、敬の素り禮せざるを以て之を銜うづんで曰く、昔、呉王、范蠡を殺さずして蠡卒に呉を沼にす。王衍、石勒を殺さずして勤終に衍を斃す。陛下の藉る所、重きを爲すは全く地勢に在り。敬の言を用ひて北平を離れしむれば、直に囊中の物なり。豈に今日有らんや。」

と道衍は卓敬を死に至らしめたことを記している。^⑩

靖難の変における功績によって、道衍は建文四年（一四〇二）十月に僧録司左善世を拝し、永樂二年（一四〇四）四月には資善大夫太子少師を拝して、その姓姚を復し、廣孝の名を賜い、祖父と父にも同じ官を追贈された。王鏊の姚廣孝伝には、これらの論功行賞について、

「元の劉秉忠に擬す。」

と評している。『明史』卷百四十五には道衍が嵩山寺に游んだおり、袁珙がその相を見て

「是れ何ぞ異僧なるや。目は三角なり、形は病虎の如し。性必ず殺を嗜まん。劉秉忠の流なり。」

といい、道衍は大いに喜んだことを記している。劉秉忠は『元史』卷一百五十七に伝があり、始め出家して子聡と名乗っていたが、後にフビライの顧問となり太保を拝した。袁珙の評が影響したか否かは知るよしもないが、道衍は劉秉忠を思慕するところがあったようである。『逃虚子詩集』卷一には「劉文貞公墓」の詩を収め、

「良驥 色は羣と同じく

至人 迹は俗と混ず

知己 苟も遇わざれば

終世 怨讟せず

偉なるかな、藏春公

簞瓢もて巖谷に樂しむ

一朝 風雲會して

君臣自ずから心服す

大業の計 已に成りて

勲名 簡牘に照らす

身退いて即ち長く往き

川流れて 去きて復する無し

佳城 百年の後

鬱々たり 盧溝の北

松楸 烟靄青く

翁仲 靡蕪綠なり

強梁敢へて犯さず

何人も敢へて樵牧せん

王俠の墓 累々として

癢なること草宿を待たず

惟だ公は民望在り

天地 傾覆を同じくす

斯人 作すべからず

再拝して還一哭す[㊤]

と詠じ、同巻八に収められている「謁春日劉太保墓」の詩は、

「芳時 壠に登り藏春に謁す

兵後 松楸は斷薪に化す。

道衍（姚廣孝）の信仰

雲暗く 平原に眠る石獸

雨荒く 深隧に泣く山神

殘碑辭蝕み 文章は舊し

異代の人傳へて 姓字新し

華衣 歸鶴の怨を存せず

幾多の行客 泪巾を沾す^④

と詠じ、劉秉忠（藏春公）に対する道衍の敬慕の情を見る。

道衍は永楽帝の命によって還俗したが、

「蓄髪を命ぜられるも肯んぜず、第及び兩宮人を賜るも受けず、常に僧寺に居りて、冠帶して朝し、退きて仍ほ緇衣す。」^⑤

と僧であることをやめようとせずに、

「一鶏を畜し、毎に鶏一號すれば即ち起き朗然と誦經す。」^⑥

と、日常生活を律して送ったという。しかし靖難の変において、多くの人を死に至らしめ、多くの土地を戦場と化した責は免れ得るところではなく、特に故郷の人々の態度は、功成り名を遂げた彼にとって思いがけなく厳しいものであった。建文四年六月に郷里に帰った道衍は八十歳に近い姉を訪ねたが、姉は会おうとせず、やつのことでは会おうと、昔の和尚はこんな人ではなかったのに。」という冷たい言葉を放つや、戸の内にひきこんで再び出ることはなかった。また、道衍の旧友である呉郡の隱士光庵先生王質も、なかなか会おうとしなかった。薪割りに忙しくて面会する暇がないといい、或いは、遙か遠くに望んで、「和尚誤てり、和尚誤てり。」と繰り返すのみであったと

いう。^②

靖難の変以後、還俗させられながらも、僧としての毎日を守り続けたとはいえ、靖難の年以前にみられたような自らの信仰について述べた文書や信仰鼓吹の著作は残されていない。燕王に親近する前後に、盛んに浄土関係の著作を行っていたことからみると、道衍が意図して、敢えてそのような活動を行わなかったように思える。姚廣孝の名、太子少師の高位は靖難の変における数々の罪の証とも言え、布教など思いもよらなかったのかもしれない。或いは、深く自己を反省し、自ら慎む毎日であったのかもしれない。

永楽十年（一四二二）十月に公務を退いているが、その一カ月後に道衍の著作の中で最も社会に注目された『道餘録』^③を撰している。『道餘録』は、その序文によると、

「余曩に僧と爲りし時、元季の兵亂に値ふ。年三十に近くして、愚庵及和尚に従ひて、徑山において、禪學を習ふ。暇あれば則ち内外の典籍を披閱し、以て才識に資す。因みに河南の二程先生の遺書及び新安の晦庵朱先生の語録を觀る。三先生、皆趙宋に生まれ、聖人千載不傳の學を傳ふ。謂ふ可し、世の英傑に間し、世の眞儒たりと。三先生、名教を輔くるに因りて、惟だ佛老を攘斥するを以て心と爲す。太史公曰く、世の老子を學する者は則ち儒學を細く、儒學も亦老子を細く。道同じからざれば、相爲に謀らずと。古今共に然り。奚ぞ怪しむに足らんや。三先生、既に斯文の宗主、後學の師範爲り。佛老を攘斥すと雖も、必ず當に理に據るべし。至公無私なれば則ち人心焉に服せん。三先生、多く佛書を探らざるに因りて佛の底蘊を知らず。一ら私意を以て邪説の辭を出す。枉抑すること太だ過ぎたり。世の人心も亦多く平らかならず。況んや其の學を宗とする者をや。二程先生の遺書の中に二十八條有り、晦庵朱先生の語録の中に二十一條有るは、極めて謬誕を爲す。余揣らずして乃ち爲に條を逐ひ理に據って一一剖析す。豈に敢へて言、三先生と辯せんや。已むを得ざればなり。亦佛に倭^{おそ}ねるに非ざるなり。

藁成り巾笥に藏すること年有り。今冬十月、余公自ら退かる。因みに、故紙を検して此の藁を得たり。即ち淨寫して帙を成す。目して道餘錄と曰ふ。之を几案の間に置く。士君子の余を過ぎて是の録を覽ずる者有らば我を知り我を罪するは其れ茲に在らんか。

永樂十年歲は壬辰に在り、冬十一月長至の日、逃虚子序す。」

と、二程子と朱子の仏教攻撃に対して、その非難が不当であることをに『二程遺書』から二十八條、『朱子語類』から二十一條を抜粋して、その一一について反駁を加えたものである。道衍の著述に『道餘錄』のあることは史書にも記載があり、王鏊の姚廣孝伝に、

「別に道餘錄有り。専ら程朱を詆る。識者之を非とす。」

とあり、『明書』卷百六十にも同様のことが述べられている。又『明史』卷百四十五に

「晩に道餘錄を著す。頗る先儒を毀り、識者鄙む。」

と記されている。ここに「晩」とあるのは序を附して公にしようとしたのが永樂十年、道衍七十八歳の時であることを指すものであると考えられるが、その序に記されているように、實際に著作されたのは、それより以前であり、その明らかな年時は、この序文から知ることはできない。又、これらの史書の記載から、儒教を国家の礎とする當時の中国社会に『道餘錄』は受け入れがたい書であったことが窺われる。王鏊の姚廣孝伝には続いて

「其の友張洪、嘗て云ふ。少師、我に厚かりし、今死せり。以て之に報ずる無し。但、道餘錄を見れば輒ち爲に焚棄す。」

と、当時『道餘錄』が非常に危険な書であったことを記している。

『道餘錄』の内容は上述のように宋儒の仏教攻撃に対する反論であるが、自序に「理に據って」「至公無私」と

いつているようにその反駁は仏典に拠るだけでなく、別表のように儒教の經典にも根拠をおくものである。しかし、
「豈に敢へて言、三先生と辯ぜんや。」といっているにもかかわらず、その語氣は激しく、

「明道の斯の如きの見、杞國の天の傾くを憂ふる者と日を同じくして語る可きなり。」

「伊川の良心、何くにか在らん。」

「朱子は其の大体を論ぜずして其の枝末を責む。何ぞ識量の狭きや。」

などと罵っており、このような書を晩年に敢えて公にしようとした道衍の激しい性格を知るとともに、史書に「非」とされたことも頷ける。ただ、靖難の変以前は、あれほど念仏信仰に傾倒をみせていたにもかかわらず、『道餘錄』においては浄土教について一切触れていない。あるいは宋儒の攻撃目標が禪にあったことにもよるだろうが、『道餘錄』では仏教の教理的な一面を問題にするのみで、「信」については問題にしないのである。道衍には『道餘錄』の他に護教の書として『仏法不可滅論』がある。著作の年時は不明であるが、撰述の目的は『道餘錄』と軌を一にするものであり、

「唐の韓愈、宋の歐陽修が輩、空言を以て之を滅せんと欲するは正に精衛の東海を填んと欲し、螻蟻の泰山に穴んと欲するが如し。その自ら量らざることを笑ふべし。」

と激しい語氣も似通っている。これら二書は自己の信仰を吐露するものでも、他の信仰を宣揚するものでもなく、仏教という自分の拠りどころとするものの正当性を主張することを目的としたものであり、靖難の変以前の著述と一線を画するものである。

永楽十六年（一四一八）三月、死の病床にある道衍を永楽帝が見舞ったおりに、僧溥治の助命を乞うている。溥治は建文帝の主録僧であり、燕王が南京に入った時、建文帝を僧にして逃がしたとの咎によって数十年間幽閉され

ていたが、道衍のこの願いによって赦されている。靖難の変以来、自分を苛んできた罪の償いの一つを、死ぬ間際に果たしたものであると言えよう。永楽十六年三月二十八日、ついに八十四歳で亡くなり、波瀾に富んだ生涯を閉じている。推誠輔國協謀宣力大臣、特進榮祿大夫、上柱國、榮國公を追贈され、恭靖と諡された。房山の東北十里の太平里に葬られ永楽帝は親しく神道碑を作りその功績を誌している。

三

道衍は、仏教僧としての出発点である出家の動機から、他の高僧・名僧と呼ばれる人たちのそれと比較すると性質を全く異にするものであった。学問をして官吏となり、出世して父母の名を顕彰することが叶わなければ、僧となり俗世間のない楽しみを受けようという、俗世間に対する名譽欲を捨てきれないままの出家であったと言えることができる。このことは、後の道衍の行動から後人が伝記に付会したのかもしれないが、袁珙の「劉秉忠のたぐいならん。」という言葉に喜んだ話と共に、道衍のひととなりをよく表している。又、道衍が官途を選ばずに僧としての道を選んだのは、丁度、選択の時期が元末の兵乱期であり、時の朝廷である元の支配力が衰微していたことにも起因するものかもしれない。出家してからも、兵家の言に通じた席応真より学を得たことなどは、俗世間に対する未練とも言うべきものである。仏教僧としての学問・信仰は天台から禅という遍歴の後浄土教へと移行し、燕王に近侍する前後においては真摯な念仏行者であったことが、このころの浄土信仰宣揚の著作が多く撰せられていることや、その著作の中にみられる道衍自身の言葉から察することができるが、道衍が最終的に浄土教に帰依したのは、「蓮華室銘并序」において自ら「業深く障重し」と、断ち切れない名譽欲を強く自覚していたうえでの選択であったと言えるのではないか。『逃虚子詩集』に残された劉秉忠を慕って詠んだ詩など、僧としては強すぎるともいえ

る情感を觀る時、その感を強くするのである。又、道衍が後に燕王の参謀として活躍したという一面を先入主としながら、淨土關係の彼の著述を見る時、淨土教鼓吹の書でありながらも、禪苑に身を處きながら淨土に帰した道衍自身の大義名分を喧伝する目的もあつたのではないかという思ひは、いささか偏見に過ぎるであらうか。

道衍の生涯をみると、大きく二つに分けることができる。言うまでもなく、靖難の変以前と以後である。靖難の変以前においては、信仰を吐露する文章や信仰鼓吹の著述など多く残されているが、靖難の変以後においては、全く残されていない。『道餘錄』や『佛法不可滅論』は護教の書ではあるが、排他的な色彩が強く、信仰云々の書ではない。信の面には一切触れず、専ら仏教の存在価値のみを主張するものである。靖難の変における功によって最高の要職を得ることはできたが、卓敬をはじめ多くの人々を死においやったことは、道衍の心の中に深く残り、故郷の旧知の人々の思いがけない冷遇によって、その罪の深さを強く自覚したに違いない。死ぬ間際に、永楽帝に溥洽の助命を願ったことは、靖難の変において犯した数々の罪を忘れることなく意識しつづけていたことを示すものではないだろうか。そして、このような自分が、いかなる布教を行い、いかに真摯な信仰者であると説いても、説得力の無いことを道衍自身が一番よく知っていたのではないだろうか。自分の煩惱の深さを知りつつ出家し、煩惱の故に浄土教を選びながら、その煩惱を抑えきれずに風雲に身を任せて高位を得たものの、宗教者としては弁解の余地の無い罪を背負って晩年を送らねばならなかった一人の僧の姿を「異僧」と言われ、「奇士」と評された道衍の中に見出すのである。

詳

① 北京図書館蔵『逃虚類藁』は九十三の道衍撰の文を収めている。その内訳は、

北京圖書館藏『逃虛類藁』は九十三の道衍撰の文を収
 めている。その内訳は、

第一 賦頌	三	第二 記	一一
第三 碑塔銘	四	第四 表墓銘	二
第五 序	一二	第六 讚銘說	一六
第七 襍著	八	第八 伝行狀祭文	六

第九 書類傳 九 第十 疏

二二

となっており、末尾には清の蔣士銓（一七二五〜八四）の跋が附されている。巻頭に序文があるが、それは『道餘錄』の序を転用したもので、このことについては蔣士銓も触れている。『逃虚類藁』に収められたものは主として靖難の変以前に撰されたものであると思われるが、従来の資料に見られなかった道衍の行動を明らかにするものであり、特に道衍が幅広く僧侶として活動していたことを知る上で貴重な手掛りとなる。昭和六十二年八月牧田諦亮博士が入手された写真を複写させていただき、本文の執筆に大いに参考としたものである。

- ② 道士席應眞については、道衍の『逃虚子詩集』巻四に訪席練士詩、巻七に挽席道士の詩があり、又、『逃虚類藁』第四に収められている「海虞席先生墓銘」は席應眞の伝であると思われる。これによると、席應眞は洪武十四年三月十日に八十一歳をもって卒し、道衍は「同郡沙門道衍、先生と忘形の友為り、故に敢へて其の梗概を綴し以て墓銘に誌す。」と墓銘を作っている。その他、『逃虚類藁』巻八には祭海虞席先生文を収録している。

又、ここに見られる王行は、字を止仲、『明史』巻二百八十五に伝がみえる。道衍は『逃虚子詩集』巻三に與王止仲遊穹隆山留題顯忠寺の詩を、『逃虚類藁』第七に與王止仲書を収めており、その交渉を知る。

- ③ 『神道碑』の碑文は『國朝獻徵錄』巻六及び『畿輔通志』巻百六十七に抄録されている。その碑は現在も北京郊外に墓塔とともに残されており、又、拓本が北京図書館に所蔵されている。

- ④ 「潜心内典、得其闡奥、發揮激昂、廣博敷暢、波瀾老成、大振宗風。旁通儒術、至諸子百家、無不貫穿。故其文章閑嚴、諸律高簡、皆超絕塵世。雖名人魁士、心服其能、每以爲不及也。」

- ⑤ 『逃虚類藁』第三
⑥ 『逃虚類藁』第四
⑦ 『逃虚類藁』第七
⑧ 『逃虚類藁』第七
⑨ 『逃虚類藁』第一
⑩ 『逃虚類藁』第一
⑪ 『逃虚類藁』第二
⑫ 『逃虚類藁』第六

ここに引いている龍樹の偈文は『十住毘婆沙論』卷五易行品（大正藏卷二十六・四十三頁中）の引用である。

- ⑬ 芳賀幸四郎博士は『東山文化の研究』（昭和二十年、河出書房）において『蔭涼軒日録』『碧山日録』の記述から道衍に『蓮室集』の著のあることを指摘され、牧田諦亮博士は『佛教大學佛教文化研究所年報』第二号「道衍の『蓮室集』について」において『蓮室集』の佚文を

集められ、注釈を加えられている。

⑭『譙園年來戰血乾 烟花猶自半凋殘

五洲山近朝雲亂 萬歲樓空夜月寒

江水無潮通鐵甕 野田有路至金壇

蕭梁事業今何在 北固青青眼倦看」

⑮『明書』卷一六〇

⑯「及皇考賓天而奸臣擅命、變更舊章、搆爲禍亂、危迫

朕躬。朕惟宗社至重、匡救之責實有所在。廣孝于時、識

進退存亡之理、明安危禍福之機、先機效謀。言無不合、

出入左右帷幄之間啓沃良多。」

⑰『國朝獻徵錄』卷三十所収

⑱『國朝獻徵錄』卷三十所収

⑲『明書』卷百三、『明史』卷百四十一

⑳「良驥色同羣 至人迹混俗

知己苟不遇 終世不怨讟

偉哉藏春公 筆瓢樂巖谷

一朝風雲會 君臣自心腹

大業計已成 勲名照簡牘

身退即長往 川海去無復

佳城百年後 鬱々盧溝北

松楸烟靄青 翁仲靡蕪綠

強梁不敢犯 何人敢樵牧

王俠墓纍々 癯不待草宿

道衍（姚廣孝）の信仰

惟公在民望 天地同傾覆

斯人不可作 再拜還一哭」

⑳「芳時登壇謁藏春 兵後松楸化斷薪

雲暗平原眠石獸 雨荒深隧泣山神

殘碑鮮蝕文章舊 異代人傳姓字新

華表不存歸鶴怨 幾多行客泪沾巾」

㉑『明史』卷百四十五

㉒『守溪筆記』

㉓『明書』卷一六〇

㉔北平中央刻經院本『道餘錄』には範成の識語が附され、

「逃虛子、靳掌の暇において、宋儒程朱の遺書語録を披

閲す。中に多く公理に據らずして佛老を攘斥す。故に著

して此の書を爲りて分析糾正す。永樂大典に列入して人

の研究に供す。意はざりき、四庫全書中に在れり。竟に

乾隆、親しく手づから刪去を爲す。又、嘉興續藏經を査

ぶるに四十二函中に亦之有り。因りて爲に梓に付し以て

廣く流通す。」

と『道餘錄』の流伝を述べている。この書は日本にも伝

えられ、寛文六年（一六六六）に刊行され、黄檗南源性

派の跋が添えられている。この刊行によって、大阪の山

本洞雲は『道餘錄破釈』を貞享三年（一六八六）に刊行

し、一一の条文について激しく反論している。また正徳

六年（一七一六）刊、義諦の『禅籍志』においても『道

餘錄』を取り上げて紹介している。

②⑥ 『明史』卷百四十五等

本稿は明初の傑僧道衍の信仰の概要を述べたにすぎない。以後、更に道衍関係の資料を集め整理することによって、明初佛教史研究の足がかりとしたい。

§ 『道餘錄』にみられる典籍

①	二程全書 卷二	典 拠	道衍の言及している典籍
		儒教側の言及 せている典籍	
②	二程全書 卷一	『首楞嚴經』 『論語』陽貨	『史記』 『孟子』萬章下 『華嚴經』卷三十七離世間品 『法華經』卷一方便品 陶潛『歸園田居詩』
		『永嘉集』 『円覚經』 『首楞嚴經』 『孟子』尽心上	
③	二程全書 卷一	『論語』里仁 『礼記』檀弓	『易經』繫辭上 『景德伝燈録』卷三
④	二程全書 卷二九		
⑤	二程全書 卷二		
⑥	二程全書		『詩經』衛風

卷二		『莊子』大宗師 『論語』里仁・述而
⑦	二程全書 卷十九	
⑧	二程全書 卷二	『易經』繫辭上 『孟子』尽心上 ・公孫丑上
⑨	二程全書 卷四	『五燈會元』
⑩	二程全書 卷十九	
⑪	二程全書 卷二二	
⑫	二程全書 卷十二	
⑬	二程全書 卷十五	『莊子』秋水
⑭	二程全書 卷十五	
⑮	二程全書 卷十五	『論語』先進・為政 『孟子』公孫丑上
⑯	二程全書 卷十六	
⑰	二程全書 卷十五	『中庸』
⑱	二程全書 卷二十	
⑲	二程全書 卷四	『華嚴經』離世間品

(5)	朱子語類 卷一二六	慧遠・僧肇の著 『伝心法要』般若・華嚴・涅槃寶積・楞伽の各經典
(4)	朱子語類 卷一二六	
(3)	朱子語類 卷一二六	『易経』
(2)	朱子語類 卷一二六	
(1)	朱子語類 卷一二六	
(28)	二程全書 卷十九	『華嚴経』
(27)	二程全書 卷十九	
(26)	二程全書 卷十九	『景德伝燈録』五 『孟子』萬章下 『首楞嚴経』
(25)	二程全書 卷二十七	
(24)	二程全書 卷十九	
(23)	二程全書 卷十九	
(22)	二程全書 卷五	『新序』『史記』『礼記』 『左伝』
(21)	二程全書 卷八	『景德伝燈録』卷九
(20)	二程全書 卷四	『道楞嚴経』

道衍（姚廣孝）の信仰

(20)	朱子語類 卷一二六	『石林過庭録』 『大学』
(19)	朱子語類 卷一二六	『法華経』 『華嚴経』
(18)	朱子語類 卷一二六	
(17)	朱子語類 卷一二六	『入楞伽経』 『華嚴経』
(16)	朱子語類 卷一二六	『円覚経』 『首楞嚴経』 『首楞嚴経』
(15)	朱子語類 卷一二六	『大般涅槃経』 『法華経』 『史記』 『永嘉証道歌』 『列子』 『虞齋口義』 『庄子』 逍遙遊
(14)	朱子語類 卷一二六	『維摩経』
(13)	朱子語類 卷一二六	『論語』 陽貨
(12)	朱子語類 卷一二六	
(11)	朱子語類 卷一二六	『易経』繫辭上 『首楞嚴経』
(10)	朱子語類 卷一二六	
(9)	朱子語類 卷一二六	
(8)	二程全書 卷一四？	
(7)	朱子語類 卷一二六	
(6)	朱子語類 卷一二六	

(21) 朱文公文 集卷一	卷一二六
	『伊川居士帖』 『山谷集』

(大学院博士後期課程・仏教学専攻)